みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

音楽・芸能への「思い」は記録できるか? : 『大阪のエイサー』の制作と上映をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺田, 吉孝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009070

音楽・芸能への「思い」は記録できるか？

――『大阪のエイサー』の制作と上映をめぐって

寺田　吉孝

現在の日本では、音楽や芸能を娯楽と考えるのが一般的かもしれない。そのように考える人々は、忙しい日常から、ほんのひと時逃れるために、またはそのストレスから癒されるために音楽を聴き、芸能を見るのだろう。また、音楽や芸能を受動的に享受するのに飽き足らなくなって自ら演じる場合も、その動機に大差はないようである。

しかしその一方で、やむにやまれぬ気持ちで音楽・芸能に取り組んでいる人たちがいる。他の方法では表現できない、自分を表現する手段としての音楽・芸能である。このような音楽・芸能の実践は、いわゆるマイノリティ集団のなかに顕著にあらわれることが多い。主流社会において自己の文化や歴史が排除されている場合、表現の場を音楽や芸能に求めることが多いからだ。私は、そのような音楽のあり

様、人のあり様に興味を持っていくつかの事例を調べてきた。そのなかで出会ったのが、大阪に住むウチナーンチュ（沖縄人）が演じるエイサーだった。

「がじまるの会」

沖縄の日本への復帰（一九七二年）前後に集団就職で大阪にやってきた沖縄の若者たちは、厳しい労働環境に置かれていただけでなく、沖縄出身であるという理由で差別的な扱いをうけ、偏見の目に晒されることが多かった。追い詰められた青年たちの間で悲劇的な事件が多発した。このような青年たちの生活権利を守り、沖縄人として誇りを持って生活できるように結成された自助団体が「関西沖縄青少年の集い、がじまるの会」であった。差別的な待遇の改善を求める活動と並行して、文化的な集いを企画し、そのなかの柱として生まれたのがエイサーの演奏だった。沖縄では盆行事の一部として演じられてきたエイサーは、大阪で生活する沖縄出身者の自己表現手段という新しい意味付けが行われたために、その上演の形態や動機は沖縄におけるエイサーの実践と大きく異なっている。「がじまるの会」は、会が発足した一九七五年以来、ウチナーンチュが多住する大阪市大正区で「エイサー祭り」を開いてきた。この祭りが、これまで毎年途切れることなく開かれてきたことは、エイサーが大阪で定着したことを示している。

映像番組をつくる

私が大阪におけるエイサーの活動に興味を持ち始めたころ、民族文化の現在的状況を「越境」をキーワードにして提示しようとする特別展「越境する民族文化」が、私が勤務する国立民族学博物館（民博）で企画された。大阪のエイサーを広く紹介する好機だという考えもあって、この特別展の一部を担当することになった。その準備として、エイサーに関わってきたウチナーンチュのお話を聞き、また、展示場での紹介ビデオ番組を作るためにインタビューをビデオで収録させていただいた。この過程で、エイサーにかける人々の思いの深さに触れ、大阪におけるエイサーを支えているこの思いを記録することが、芸態としてのエイサーを記録すること以上に重要であると感じるようになった。特別展終了後、エイサーが始まった当時の熱い思いを記録したいという一念で、ドキュメンタリー映画の製作を思い立った。大阪のエイサーに中心的に関わった方々に取材・番組

エイサー祭りで鍋を持って踊るおばあ

制作のアドヴァイザーになっていただき、助言をいただきながら作業を進めた。番組は、インタビューを軸にして、エイサーの練習・上演の動画や「がじまるの会」発足時の写真、八ミリ映像を、語りの内容に沿うように適宜配置する構成をとった。こうして、この番組は二〇〇三年に編集作業を終え、「大阪のエイサー――思い（うむい）の交わる場」として民博内で公開されている。また二〇〇五年には、海外でも上映できるように英語版を作った。

語りの肌理

エイサーに対する人々の思いは実に様々である。また、同一人物でも両義的な思いを抱いていることも多い。そのような状況をどのように記録すればよいか。語りは、語られる言葉だけでなく、どのように語られるかが重要である。語り手の声の調子、ちょっとした表情、仕草の変化などが、語られるテクスト以上に雄弁に語り手の思い、またはその複合性、を表すときがある。

例えば、取材中に行ったインタビューで、ある男性は終始笑顔で自分の在阪体験を語ってくれたが、その笑顔と彼が発している言葉の間にはある種の緊張があった。それは、話の裏に何か別の事柄が潜んでいる証のようでもあったし、思いを語り切れていないというもどかしさの表れにも思えた。文字媒体ではそのような表情は無視されたかもしれないし、いまここで表現しているように文字化して（固定化して）記録されたかもしれない。しかし、後者の場合、それは所詮私の感じ方を記しただけである。そのような調査者の解釈を示すより、先入観なしにこの表情を記録し、見てもらうことの方が重要であると

思えた。映像は、このような語りの内包する多様性、複合性をそのまま示せるという点で優れている。

しかし、自分の解釈を述べないことで番組の無垢な中立性を主張しようとしているのではない。編集時に、番組の構成や場面の選定を私が行っている以上、全体として私の見方が反映されているのは言うまでもない。また、インタビューにおける語りは私に向かって発せられるのだから、私と語り手の関係が映像に移りこむ（語りや表情に影響する）ことは必至である。しかし、その制約のなかで、エイサーへの深く複雑な思いを、私というフィルターを可能な限り少なくして伝えたかった。番組にナレーションを使わなかったのも、必要があれば再編集が容易に行えるように配慮しただけではなく、プロのナレーターの画一化された語り口の異質感や、一方的に説明を行う権威性を極力排除したかったからである。

このように、語りの肌理に含有される思いの深さや広がりに留意しながら編集を進めたため、その結果、語りのテクスト部分だけに注目すると、若干の重複があると思われるかもしれない。実際、これまでにも数人の映像作家や人類学者から「私なら、この映画は一五分くらい縮める」、「インタビューが多すぎる。映像ではなく文字におとして記録する方がよい」などのご批判をいただいた。色彩、形、音が秒単位で変化する映像になれた感性には、顔を見ながら時間をかけて話を聞くことは、それほどの苦痛を伴うのだろうか。時間の限られた映像番組では、言葉にできないような複雑な思いは単純化して、また類型化して示すしかないのだろうか。このように提案された方法は、語りをいわば文字情報として伝達するのなら効率的かもしれないが、映像の本来的な可能性を狭めているように思えてならない。

思いと沈黙

しかし、課題となる点も少なくない。今いちばん気になっているのは、「がじまるの会」の活動を陰で応援していた一世の老人(おじい、おばあ)たちが番組に登場しないことである。会の結成当初、メンバーたちはヤマト社会との軋轢から劣悪な環境に置かれていただけでなく、エイサーを通して沖縄の文化を公(ヤマト)の空間に出すことに対して、沖縄県人会に所属するウチナーンチュから強い反対を受けていた。このように、コミュニティ内外で様々な問題を抱えていた「がじまるの会」を勇気づけたのが、寡黙な一世のおじい・おばあたちの存在であった。

彼らが無言で「がじまるの会」の練習を見守ったり、招待券を枕元において「エイサー祭り」を心待ちにしていた、といったエピソードを聞き知っていたので、取材当初はそのような経験を語る姿を映像に収めたいと考えていた。しかし、その考えは取材を進める過程で徐々に変っていった。おじい、おばあと接触する機会を持つにつれ、もともと言葉少ない彼らにカメラの前で語ることを促すのは、論理的に矛盾しているだけでなく、彼らの沈黙の意味に思いをはせる想像力が不足しているからではないか。

私と同じ民族音楽学を学ぶ旧友は、語ることができないのであれば、その沈黙こそが背後にある記憶や思いを雄弁に「語る」のだから、映像として生かすべきではないかという提言をしてくれた。音や動きがないことは、通常のインタビューの反転であり、何が次に起こるのかという期待・不安も手伝って、映像と見るものとの間に強い緊張がうまれる。この緊張のために、見る者は沈黙の背後にある語ることのできない「思い」に想像力を働かせることになり、それは様々な思索につながっていくだろう。しか

し、このような「沈黙」はなんらかの脈絡がなければ、見るものは全く手掛かりを失って想像力を働かせることさえできなくなる。またそれと同時に、安易な方向付けは短絡的な結論へ見るものを導く危険性がある。結局、おじい・おばあたちの撮影は取りやめ、彼らの沈黙に込められた思いは「がじまるの会」のメンバーの言葉を通してのみ語られている。

しかし、別の観点から見ると、沈黙は一世の老人たちだけに限られるわけではない。エイサーを始めた「がじまるの会」のメンバーもまた、ヤマト社会の圧力から、寡黙にならざるを得ない状況にもがき苦しんでいたはずである。通常のメディアでは表現できない思いをもつマイノリティの人々が、見ること・参加することを含めて音楽や芸能にその表出の活路を見出すのであれば、インタビューを中心にした番組構成は、言葉による語りに過度に頼る結果となってはいないか。

交わる場としての上映会

このような番組制作が提起する問題を考えるうちに、多様な文化的背景や専門的知識をもつ人々から意見を求めたいと考えるようになった。番組は民博内で公開されているが、見ることができるのは来館者に限られている。また、館で見てもらう場合でも、番組に対する反応は制作を担当した私には伝わってこない。映画作りは番組が完成すると一応終了すると考えられるかもしれないが、その有効性は、番組が出来上がった後の使われ方によって大きく左右される。

そこで私は、いろいろな場所に出向いて上映会を開くことにした。二〇〇五年以降、日本だけではな

く、アメリカ合衆国、インド、チェコで上映会を開き、それぞれの場所で、質疑応答の時間をとってもらい感想や意見をいただいている。映画に対する感想を今後の番組つくりの参考にしたいという気持ちから始めたのだが、次第に番組を見せるときに生まれるコミュニケーションの場としての可能性、人をつないでいく可能性に注目するようになった。

二〇〇七年春には、北米に住むウチナーンチュにも番組を見てもらう機会に恵まれた。口コミでこの映画のことを知ったワシントン沖縄会が、上映会をしたいと申し出てくれたのだ。関西とアメリカ東海岸地域では、ウチナーンチュの移住の経緯やコミュニティの置かれた状況は大きく異なるが、沖縄を離れてマイノリティとして生きる点は共通している。熱心に番組を見てくれたのは、大阪のウチナーンチュたちの経験に自らを重ねあわせた人が多かったからだろう。二〇〇七年夏に沖縄の本部で行った上映会では、地元のエイサー・グループのメンバーが映画を見てくれた。彼らは、これを一つのきっかけとして、大阪のウチナーンチュ社会やエイサー活動に興味を持ち、毎年九月に開かれる「エイサー祭り」にも参加するようになった。沖縄内外に住むウチナーンチュは、お互いの生活や歴史、文化活動に関して情報を十分に共有しているとは言いがたい。地域的に分断されたウチナーンチュが、それぞれの経験を共有し、共通の問題を一緒に考える機会をつくることに、この番組が少しでも役に立ったのなら、私にとってこれほどの喜びはない。

また、日本や沖縄に関する知識はないが、番組が内包しているより一般的なテーマに興味を持って見てくれた人々もいる。二〇〇八年夏に南インドのマドラス大学で行った上映会がその一例である。同大

学のマスメディア・コミュニケーション学部が、「メディアと社会――芸能と周縁的コミュニティのエンパワメント」と題するセミナー・シリーズを企画しており、その一部として上映会を開いてくれた。上映後の質疑応答では、日本の多文化的状況やマイノリティ集団に関する全般的な質問もあったが、議論は、インドにおける事例（以前不可触民と呼ばれたダリットの人たちが演奏する太鼓音楽タップアーッタムなど）との比較や、音楽・芸能がマイノリティ集団のアイデンティティ構築・維持に果たす役割に集中した。今後は、大阪のエイサーが提起する問題をより広い文脈で考えるためにも、そしてその議論を学界に閉じ込めないためにも、上映会だけでなく、音楽・芸能にかかわるマイノリティ集団が直接交流できる企画を考えていきたい。

開かれた映像に向けて

私はこの小文の冒頭で、マイノリティ集団が音楽・芸能活動に参加するのは、他のメディアでは表現不可能な思いを表現できる可能性をそこに見るからであると述べた。しかし、これはあまりにも直線的で単純化された言いまわしかもしれない。表現すべき考え・思いがすでにはっきりとした形で存在していて、それを伝えるためのメディアとして音楽・芸能を選択するというより、自分自身判然としない不安・怒り・疎外感、そしてそれらを含む自己イメージが、音楽・芸能にかかわることによって、また音楽・芸能の実践のプロセスにおける人との交流によって、次第に明確化してくると考える方がより正確である。見ること、語ることを含めて音楽・芸能を実践することが、彼らのアイデンティティが作られる複

雑なプロセスの一部であるとするならば、そのプロセスの研究に映像はどのような貢献ができるのか。

「大阪のエイサー」を制作・上映する経験から、私は映像番組を作るプロセスが、通常接触する機会を持たない人々を結びつけ、一つのテーマに沿って交流できる場を作りうることを学んだ。民博が、一方的に情報を伝える従来型の博物館から、参加するものが双方向的に学び合えるフォーラム型博物館への脱皮を模索しているように、映像を固定化された作品、または一方向的に情報を伝えるメディアとしてではなく、制作や上映を通して人々が交流する継続的なプロセスとしてとらえたい。そのように考えれば、監修者・制作者の作品として完成された番組は存在せず、映像は常時書き込みや変更の可能性をもつオープンな場となり得る。今後も、そのような開かれた映像の可能性と問題点を、具体的な事例に沿って考えていきたい。

＊この小論は拙稿「芸能への思いを記録する――「大阪のエイサー」の制作をめぐって」（『民博通信』一二〇号、二〇〇八年）をもとに大幅に加筆・修正したものです。内容に重複する箇所があることをご容赦ください。

【読書案内】

伊藤俊治・港千尋編『映像人類学の冒険』せりか書房、一九九九年。

映像人類学に関する刺激的な論考と討論の記録。視覚的側面に関する着眼点や考察の秀逸さと比べ、全般的に音に関する関心が低い点が印象的である。

鎌仲ひとみ・金聖雄・海南友子『ドキュメンタリーの力』（寺子屋新書）、子どもの未来社、二〇〇五年。

三人の映像作家が撮影対象の人々との関係や制作プロセスにおける問題点などを感動的に語る。ドキュメンタリーを自主制作する難しさと醍醐味を教えてくれる一冊。